

健やかな子どもの成長を目指した協働体制づくり

ー異年齢交流「西小タイム」を通してー

教職実践応用領域 学校づくり履修モデル

加藤 裕子

1 研究の背景

1) 少子高齢化

総務省統計局の人口推計によれば、少子高齢化がますます進行していることが伺える。核家族化や一人っ子家庭が増加しているため、子どもを取り巻く環境は大きく変化してきている。

日本学術会議の調査においても、子どもの遊びの重要性について指摘している。自分自身で体験したり、他者と直接コミュニケーションをとったりするなど、経験の多くは遊びを通して得ることができる。とまとめており、人間の成長は遊びとともにあるとしている。しかしながら、今日の外遊びは大きく変化、減少していると見られる。

さらに日本学術会議では、自然消滅などの都市化や少子化などの社会的変化、文化的変化など、子どもの遊びと様々な変化が複雑に絡み合い、遊びの変化とともに、空間、時間、仲間集団などに悪循環が見られるとしている。

2) 体力・運動能力低下

文部科学省の体力・運動能力調査の結果によると、新体力テスト施行後の17年間の基礎的運動能力は、一部の種目を除いて緩やかな向上傾向を示しているが、現在子どもの体力・運動能力は、体力水準が高かった昭和60年(1985年)以降、依然低い水準であることが分かっている。

また、運動やスポーツを実施する頻度が高い児童ほど、新体力テストの合計点も高い傾向にあり、体力水準の高さと運動やスポーツの実施頻度の高さには関係が認められていることから、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成は、体力水準を高く保つためにも重要な要因である。

日本学術会議の調査でも、子どもの育成環境は極めて深刻な状況にあるとしており、発育期の児童の動作発達や運動能力の低下などに加えて、不登校やうつ症状等、精神的にも困難な状況に陥る子どもが増加するなど、体力・運動能力の身体的な面以外に、精神的発達・意欲面も見直していく必要があるとまとめている。

3) 子どもを取り巻く遊びの変化と環境

i) 遊びの質的な変化

環境白書は、遊びの質的な変化を玩具の移り変わりで見ている。祖父母や父母の世代では、木の枝を使って遊び道具を製作したり、鬼ごっこや缶けり、植物や昆虫、生き物採取をしたりするなど、屋外での

遊びが中心であり、遊び道具を工夫することによって、遊びに意外性や多様性が生まれていた。しかし現在では、捕獲するような自然体験や生活体験自体が不足し、苦労して捕獲する経験も少ない。

他にも現在の子供たちは、テレビ(パソコン)ゲームで遊んでいることが多く、厚生労働省の家庭児童調査においても、屋外における遊び時間の減少や、地域における遊びの多様性が失われ、画一化が進んでいることや、動植物などの自然素材を活用した遊び、地域の伝統的な遊び等が減少し、単純化していることが問題として挙げられている。

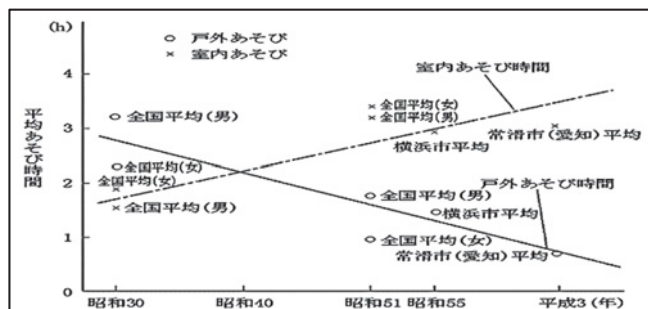
さらに川村らは、商品化された玩具は、子どもの一人遊びに一層拍車をかけることにつながると危惧している。玩具が変化することによって、遊びの質が変化し、遊びを通じて培われるはずの子どものイメージの貧困化を招くことにつながっている。

ii) 遊びの場と時間の変化

環境白書の調査では、自然の川や池、森、雑木林、田畑等の減少が著しいとしている。高度経済成長にともない車社会が子どもたちの遊ぶ場所を占拠し、その結果、子どもたちは室内へ追いやられてしまったと考えられる。

また川や海の水が汚染され、泳いだり魚をとったりすることもできなくなっている。安全への意識が高まり、水辺へ近づくことさえ禁止されるようになった。この遊び空間の減少が、現在の小学生の遊びにも大きく関係している。

遊び場と同じように変化が見られるのは遊びの時間である。仙田の調査によると、昭和40年頃に屋外遊びと屋内遊びの時間が逆転し、平成3年では屋外遊びは屋内遊びの1/4の時間になっている。



(図1) 仙田満『子どもと遊び』岩波書店、1992より

iii) 遊び仲間の変化

仙田の調査によると、遊び時間がないために、遊

び仲間である遊び集団が形成されにくく、遊び集団がないために遊びが希薄化し、その結果、遊ぶ意欲そのものが低下することで、また遊びの時間が少なくなるという悪循環の構造を示している。

また、社会変化の一つとして、習い事や塾産業の発展から、学校の終業後や土日にも、習い事の時間を気にしつつ遊ぶ子どもたちが多いように感じる。このことから、児童が終業後に遊ぶ時間を確保できていないことが、遊び仲間や遊びの質的な変化をもたらせていると考えることができる。

子どもが遊びの中でしか得ることのできない、子どもらしい健康さに満ちている状態を取り戻し、子どもらしく生きることができるように、子どもたちの遊びを昔のように取り戻す必要があると考える。

2 西小学校の現状

本校は、都市化が進む中、古くから閑静な住宅街として栄え、戸建て住宅を中心に、核家族だけでなく三世代も同居している地域で、学級数は17（特別支援学級2含む）、児童数480名前後の中規模校である。地域住民や保護者の教育への関心は高く、授業参観への参加率は保護者全体の約90%を上回っている。また、PTA活動にも積極的な保護者が多く様々な面から学校の教育活動と児童を支えている。

1) 西小タイムの経緯

平成22年度より、「西小タイム」という、毎週水曜日の清掃時間に児童会や委員会活動など全校が関わる活動時間が設定された。しかし、課題が多く挙げられ、平成23年度には隔週、平成24年度からは月1回へと活動回数を減らし、学校全体が関わる活動から、学級や学年での活動へと変更され、現在まで実施されてきた。

2) 「西小タイム」の教育的位置づけ

月に1回水曜日の清掃時間を変更し、15分間学級・学年の時間として使用されているが、活動計画やねらいが統一されていないため、活動は教師の一存に委ねられることも多く、活動場所が混み合い、大きなケガに繋がることもあった。事前・事後指導や振り返りもないため、楽しみは一過性のものに留まり、活動に深まりや児童の成長を感じることができない現状である。

3) 西小学校の体力テストの結果

全国平均は、平成26年度までの過去5年間で年々上昇してきている。しかし本校の走力や跳力は、女子では全国と同程度のレベルであるが、近年の男子の記録は全国平均を全体的に下回る傾向が見られる。男女ともに投力や握力、上体起こしは低下傾向にあり、男女ともに体力・運動能力において課題があると考えられる。

4) 児童事前アンケート

i) 遊ぶ人数

事前調査(平成27年1月15日実施、対象児童309名)により、大勢(6人以上)で遊ぶ児童は全体でも50%を切り、学年が上がるに従って大勢で遊ぶ児童は少ないことが判明した。しかし、大勢で遊びたいという気持ちをもった児童は50%~80%前後と多いため、現状では人が集まらず、少人数で遊ぶことしかできていないといえることができる。

ii) 遊ぶ時間・場所

毎日1時間以上遊んでいる児童は、中学年では多いが、学年が上がるほど減っている。また、中学年では約40%の児童が室内で遊んでおり、学年が上がるほど室内遊びの児童数は増える傾向にある。

しかし時間があればもっと外で遊びたいと考えている児童は全体でも半数を超えている。外で遊びたい気持ちはあるが、現状では時間的な余裕がなく、室内遊びに留まっている児童が多いといえる。

iii) 遊ぶ仲間

各学年で約80%前後の児童が同学年の友達と遊んでおり、学年が上がるほど同学年の友達と遊ぶ児童が増えている。中学年は50%以上が他学年ともっと遊びたいと考えているのに対し、高学年は40%を下回っている。このことから、他学年との交流経験が乏しいため、必然的に同学年の友達に遊び仲間が限定されているといえることができる。

5) 本校教職員の意識調査

i) 遊びと運動について

平成27年1月15日に、本校全職員を対象にアンケート調査を実施した。「外遊びは児童にとって必要である」と答えた教職員は100%であり、教職員は児童に外遊びを行ってほしいという願いをもっていることが分かる。その背景には、「児童の体力や運動能力が落ちてきていると感じる」教職員が、全体の55%もいることや、体力テストの結果からも推察でき、このことから本校の課題の一つであるといえることができる。

ii) 異学年交流について

異年齢交流の必要性を感じている教職員は80%を超えている。実際の学校生活の中で、他学年の児童と交流している様子が見られないことや、本校では登下校と清掃時しか異年齢交流を行っていないことから、このような結果になったと考えることができる。

iii) 西小タイムについて

「西小タイムを必要だと感じている」教職員が60%いるのに対し、「取り組みたいことがある」と答えた教職員はわずか35%であった。西小タイムという時間は子どもにとって必要であると感じているが、意義や目的、取組については不明瞭な点が多く、

課題の一つであるといえる。

iv) 養護教諭への聞き取り調査（平成 27 年 1 月 26 日実施）

子どもの体の発達に専門的に関わり、本校児童の実態を最もよく把握していると考えられることから、養護教諭Nへ聞き取り調査を実施した。その際、子どものアンケート結果を踏まえて、Nから次の6つの観点について示唆を得た。

第一に社会性や規範意識、自己有用感についてである。Nによれば、本校の児童はメンタル面ではよい方向に向かっていると感じる。しかし、高学年では「自分は自分」という意識が強く、他と関わることを避けたり、大人数は面倒だと感じていることがわかる。高学年の女子児童は第二次性徴の時期にも当たり、発達年齢に応じた反応なのか、本校だけの事例なのか、判断が難しいとしている。

また、自己有用感については、養護教諭の立場から全校を見ると、3年生と5年生が低く、学年の傾向が出ていると感じる。どう伸ばしていくかが課題であると述べている。

規範意識については、子どもの認識と、教師の認識にずれがあることが分かる。例えば自分から挨拶をしていると思っている児童は多いが、教師から見ると、まだまだ「自分から進んで」という部分で改善の余地があるとの調査結果が出ている。

第二は遊びの視点である。6年生があまり遊んでいない状況から、遊べない原因は忙しさだと考えていた。しかし、調査結果から、遊びが偏っていたり、大勢での遊びや、遊びそのものを知らないのではないかと、Nは子どもの遊びを問題視している。

第三は異年齢交流の視点から、横のつながりはあるが、縦のつながりが見られない。異年齢と知り合ったり、触れあったりする場が少なく、どのように接してよいのか分からないためだと考えられる。この結果が、「他学年の友達ともっと遊びたい」と考える5・6年生の低さにも繋がっていると感じるため、校内の活動で、関わり合う交流があると、思いやりの心も備わるのではないかと考える。

第四は児童の学校生活の様子や、学校内で改善できる取り組みについてである。

近年は不登校児童の数が増加してきている。原因として考えられることは、人間関係（コミュニケーション）がうまくいかず、友達と関われないことだと考える。人間関係の問題が改善されれば、多くの友達と仲良くできたり、互いに注意し合うことができたりするようになり、学校が楽しくなることで、登校に繋がるのではないかと考える。

第五は、担任に望むことや、子どもの発達と遊びについてである。

小学校には長い放課が2回あるため、養護教諭と

しての願いは、晴れた日は外に出て遊んでほしい。バランスよく遊びを行うことで、体のバランスも保ち、体幹を鍛えることができる。また、みんなでワイワイ遊ぶことは、遊びの中のルールやコミュニケーション能力の育成にも繋がるので、「西小タイム」を活用して、普段児童が遊ばない（知らない）遊びを、教師が意図的に教えることもよい手段だと思う。子どもが遊びを知ることは運動にも繋がると感じる。

最後はメンタル面についてである。集団での遊びは、自分と相手を考える必要があり、みんなでルールを守ることから人間関係づくり、不登校の改善へと繋がっていくと考える。

6) 保護者・地域調査・学校評議員への聞き取り調査と校区内の公園調査

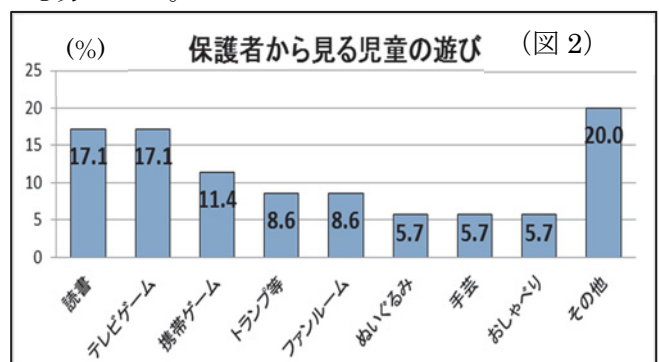
i) 学校評議員（前長久手市教育長への聞き取り調査 平成 27 年 1 月 21 日実施）

子どもたちの学校生活について、危険だからと大人の感覚でストップをかけるのではなく、子ども同士が教え合い、危ないことも自分たちで限度を知る、失敗を経験させることも必要である。しかし、大人（教職員・保護者）がどこまで我慢して見守れるかということが課題である。

また、少人数で遊ぶ子が多く、大人数で遊ぶことが少ないため、大勢の仲間と遊べるようになってほしい。他学年と遊ぶ機会を設けることで、子ども同士で遊びを教え合えるのではないかと、子どもの遊びを変化させてしまったのは、大人であると、子どもを取り巻く環境について危惧している。

ii) 保護者へのアンケート調査

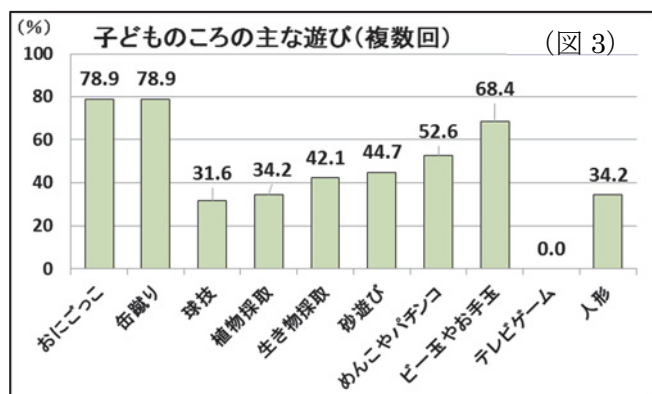
平成 27 年 1 月 30 日～2 月 6 日に行った調査の結果、家庭での遊びは、テレビゲームと携帯ゲームが全体の 30%弱と高い割合を示した(図 2)。外遊びについての意見では「たくさん外で遊んだ方がよい」「学年が上がるにつれ、習い事で遊ぶ友達が減っていることについて少し残念」と外遊びを願う反面、「子どもだけであまり外へ出たくない。いつも大人がついては行けないから」と地域の防犯面や交通事故の心配から外で遊ばせられない現状があることも分かった。



iii) 地域へのアンケート調査

平成 27 年 2 月 18 日に実施した、児童の遊びが、社会環境の変化によって大きく変わってきていることを受け、地域に在住しているシニアの方は、児童の遊びに対してどのような考えをもっているのか、昔はどのような遊びを行っていたのか、調査を行った。

図 3 のように、多くの外遊びが挙げられたことから、男女問わず屋外で遊んでいた様子が窺える。また 60 歳以上の方の幼少期・児童期は、毎日 1 時間から 4 時間程度遊ぶ時間を確保し、自然と共生しながら生活をしてきたことなど、現在の状況とは大きく違っていることが明らかになった。地域の方も、子どもたちの遊び内容の乏しさや、異年齢交流の少なさについて危惧していることや、住んでいる地域のことにも目を向けてほしいという願いをもっていることが分かった。



iv) 校区内の公園調査

校区内 4 か所の公園調査を行い、遊びの仲間集団では、異年齢で遊ぶ姿も見られた。遊ぶ場所では、広くて大きな公園よりも、少し小さめの公園の方が小学生の児童にとっては遊びやすく、広く大きな公園は、中高生や大人が使っていることで、小学生には使いづらい雰囲気があるとの声が聞かれた。

7) 西小学校の課題

児童や教職員、保護者等の願いを学校内で形成するには、現在設けられている「西小タイム」を新たに再構築することが必要である。そのための教師の協働体制づくりや、児童の異年齢交流を計画・組織し、教育活動の一部として目標を設定する新たな「西小タイム」を創生する。また、外遊びの実態があまりなく、体力の低下が見られる現状から、身体を動かす遊びを通して、リーダーの育成や社会性の育成、さらには将来的に体力や運動能力の向上を目指すことが求められている。

3 実践研究課題と方法

ここでは、研究テーマを基に、「子どもの遊び」「成長と発達に関する体力づくり」「特別活動」をめぐる

理論研究を整理する。さらに実践研究において、「西小タイム」を柱とした異年齢交流の取組と、教育課程改善における教職員の協働、児童の遊びに焦点を絞った研究構想と研究の意義について整理する。

1) 研究テーマ

「健やかな子どもの成長を目指した協働体制づくり」
～異年齢交流「西小タイム」を通して～

2) 課題設定

本校の特性や学校課題、そして児童や教職員、保護者等のニーズから、全校児童と全教職員に効果的な特別活動「西小タイム」のあり方をまとめると、次のような方向性が望ましいと考えた。

○ 学級・学年単位で運営されてきた「西小タイム」を、特別活動の異年齢交流という形で運用することにより、教育課程の一環としての、位置づけを図る。

○ 教職員が一人で 2 チームを担当することにより、リーダー育成の指導意識が芽生える。

○ 異年齢交流で互いに協力し合う経験をする中で、思いやりの気持ちやコミュニケーション能力などの社会性を育む。

○ 体を動かす遊びに親しむことを通して、体力・運動能力の向上を図り、生きる力を育む。

3) 理論研究

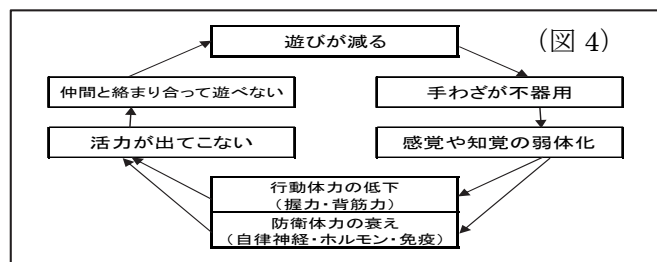
全面発達とは知・徳・体を中心に学校教育の中で児童が体験的に学ぶことによって培われる発達のことである。知識だけでなく、体験として遊びは楽しいものであるという感覚を養うことや、自ら学びたいという意欲を引き出し、遊びを発展させることのできる場が、学校教育の特別活動であるとまとめることができる。

i) 子どもの遊び

日本学術会議は、子どもの成育環境について、自身の体験や他者とのコミュニケーション経験が不足しがちであるため、生活スタイルを見直し、群れ遊びや自然体験を得る機会を増やすことで、主体的に関わる能力を養う必要があると指摘している。

また、増山は「遊びが人間を育てる」と指摘しており、遊びが失われると、手わざが不器用になり、体験的に身に付ける感覚や知覚が弱くなるとともに、行動体力や防衛体力が低下し、活力が失われることから、さらに遊びが減るという、スパイラルに陥ると主張している。だからこそ遊びを行うことは、生命機能や社会性、心の育ち、魂や生命そのものの育ちがあると考ええる。さらに、川村らも社会性や知的発達、身体的・生理的側面、自己治癒という側面において、遊びは身体面や精神面だけでなく、心理面でも効用があると指摘している。

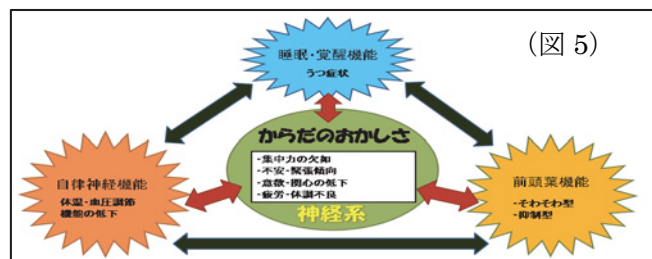
増山の理論を「遊びの減少がもたらす負のスパイラル」(図 4)として筆者が整理する。



ii) 子どものからだのおかしさと脳の発達

日本体育大学の正木らの調査では、教職員が実感している児童のからだのおかしさは「アレルギー」と「疲れた」が、1995 年以降、常にワースト 5 位以内に入り、問題が 15 年間解決されていないばかりか、増え続けていることを問題視している。他にも、前頭葉機能や自律神経機能が身体機能の発達不全と不調と関係していると指摘している。さらに大脳活動の型に関する調査では、「不活発型」の増加とともに「抑制型」も増加傾向にあり、「うつ」になりやすい性格特性と酷似しているとしている。

「うつ」の中核症状の一つである睡眠障害について野井らの研究によると、昼間の運動や規則的な食事摂取、時刻を意識することなどが大切だとまとめている。睡眠を十分にとれないことが、明日への活力を失わせ、子どもたちの集中力や、意欲・関心を奪っている。日本体育大学や野井らの理論を「からだのおかしさと脳の関係」(図 5)として筆者が整理する。



iii) 特別活動

杉田は、自己中心的な子ども、集団行動が苦手な子どもが増えたために、学校集団の機能が弱まったとし「特別活動を教育活動の基盤として捉えていく必要がある」(杉田 2009, 61)と指摘している。集団の必要性を実感させるためにも、組織的、計画的に集団活動を仕組んでいく必要があるとしている。

また、リーダーの育成では、小学校では場面リーダーの考えを大切に、多くの子どもにリーダーを経験させる一方で、リーダー性の高い子にも必ずフォロアーシップの経験をさせる必要性についてまとめている。

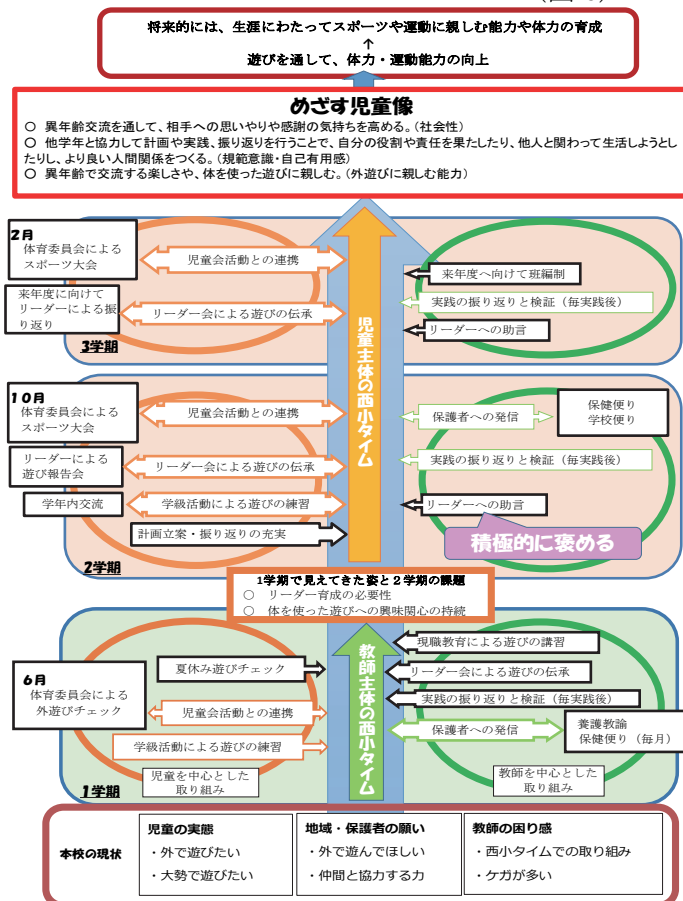
特別活動を学校教育の基盤にすえるためには、集団活動を見直し、組織し直すこと、リーダー育成を目指し、学校全体が一つのチームとして活動すること、児童がリーダーを中心として自治的な活動を行うことができるように、教師が手本を示し、指導と

支援をすることだと整理することができる。

さらに広岡は「望ましい集団の育成」について、教師は集団を組織するだけでなく、組織した後のグループに、どう働きかけるのか、児童の自主的・自発的な態度を育成していく姿勢が必要だと述べている。広岡によれば、集団づくりの発展過程を三段階に分けており、第一段階を所属集団、第二段階を協働集団、第三段階をもっとも自治的な関係が築かれるとして自治的集団としている。

4) 実践構想

(図 6)



5) 研究の意義

全校児童でペア活動を組織することで、異年齢交流を通して高学年のリーダー性や低学年の社会性を育み、体を動かす集団遊びを通して、体力・運動能力向上への興味・関心が高まるのではないかと考える。

また、ペア活動を組織するにあたり、教師集団が共通理解を図り、学校全体への意識を高めることで、協働性が強まるのではないかと考える。

4 研究の実際

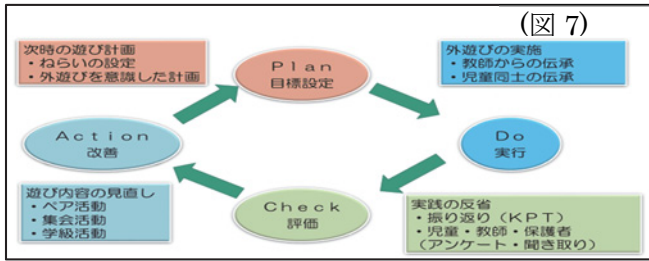
1) 教職員の協働

i) 教職員の集団づくり

～共通認識を高める手立て～

教育課程改善のため、活動を計画性をもって行うことができるよう P D C A サイクル(図 7)を利用し、

目標を明確に設定して実践を行うこととした。



①前年度の取組

手立てとして教職員へプレゼンテーションを行い、先行研究で明らかになった社会背景とその影響のうち、少子化と遊び、体力・運動能力の低下について焦点化し、本校の現状と課題、遊びの効果を提案することで共通理解を図った。

また改善点として、本校の教育活動とされている「西小タイム」が、目標やねらいをもたない活動となっていることを受け、全校で取り組む遊びを中心とした異年齢交流を行い、ねらいをもった活動を実践していくことで課題解決を図ることができることを提案した。

3月末には新年度から行う異年齢グループの編成を現担任で行い、新年度への準備と同時に、活動への意識づけを図った。

②1学期の取組

手立て①として、職員会議において「西小タイム」ではねらいを明確し、教育活動の一つとして取り組む活動であることを提案した。また、1学期間は教師がリーダーとなって活動し、高学年やリーダーの手本となり、遊びの伝承も行う。2学期からはリーダーを児童へ移行し、教師のリーダーシップは潜在化していくことを方針として打ち出した。

手立て②として、実際の顔合わせや計画・実践の流れ、タイムスケジュールを示し活動の共通理解を図った。

手立て③として、教師による振り返りを実践し、振り返りから方向修正や次回の活動意欲へつながらるようにし、原因と改善点の共通理解を図った。

手立て④として、現職教育で、「遊び」の講習会を行い、教職員の伝承遊びの不安解消に努めた。

③2学期の取組

手立て①として、1学期の実践報告と、2学期から変更される実践内容のプレゼンを行った。特に教師から児童へリーダーを移行する期間のため、教師のリーダーシップは潜在化、児童のリーダーシップは顕在化していくよう提案した。

手立て②として、毎実践の1週間前にリーダー会を実施し、児童と教師の共通理解を図り、意欲的な活動に繋がるように努めた。

ii) 共通理解と協働を可能とする通信の活用

新しい取組のため、職員全体が共通理解を図るこ

とができ、活動の趣旨を伝える手段の一つとして、通信を活用し、毎月職員に発行した。

第一号は顔合わせの振り返り分析を掲載し、次号からは遊びの紹介を行い、職員の不安解消に努めた。また、教職員への意識を高めるため、振り返りの分析結果や、活動内で見つけた改善点と改善策を計画日の2日前に配付し、教職員の意欲の継続を図った。

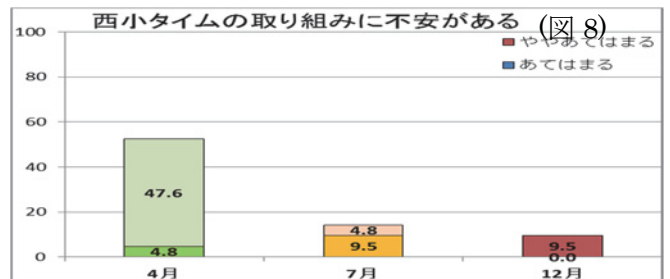
2学期は1学期と異なり、計画日の1週間前のリーダー会と同日に配付し、リーダーが担当教員と相談しやすい環境を設定した。内容も、遊び紹介中心から、実践後の教師の言葉を掲載するように変更し、活動のよい部分を児童へ伝え、児童・教職員の活動意欲向上へ繋がるよう努めた。

iii) 教職員の意識の変化

①西小タイムの取組について

4月当初は半数以上の職員が不安を抱えていたが、7月では20%弱まで減少した。(図8)1学期の実践後、リーダーシップや時間配分など、多くの不安点が挙げられ、その不安を解消できるよう改善し、2学期からの実践に取り組んだ。

2学期の実践後、不安はほぼ解消したが、新たにリーダー以外の高学年育成や楽しさの追求など、不安や問題点も見つかる結果となった。

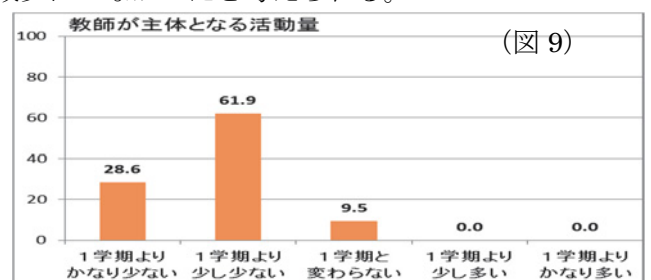


②異年齢交流について

交流には少しずつ変化が出て、異年齢での交流が増えてきていると職員が実感できた。遊びは季節が関係し、児童の間で冬の季節に外遊びが消極的になるため、他学年の友達とも関わることが少ない現状もあった。温かく遊びに適した季節であれば他学年とも楽しく遊べるのではないかと考える。

③教師の活動量について

2学期から児童主体の活動となり、1学期と比べて教師が主体となる活動の量にも変化があったことが分かる。(図9)教職員の振り返りからも、リーダーの育成が少しずつできてきた結果、教師の活動量の減少につながったと考えられる。



④職員室内での会話より

アンケート以外にも様々な変化が挙げられる。例えば出張が重なり、実践日に担当者がいないことに気付いた職員からの連絡で、事前に他の職員に担当を変更することができた。他にも低学年担任は、「西小タイム」の計画・実践日には、給食の準備を少し早め、移動時間の確保に努めようとする姿勢が見られ、活動意欲の高さを感じた。

さらに高学年担任は、1 学期には「遅れないように集合しよう」と活動を知らせる内容から、2 学期は「同じ高学年の仲間として、リーダーに任せきりにせず、自分たちも低学年も楽しめるように協力しよう」とリーダー育成や自治的活動を意識した声かけへ変化した。

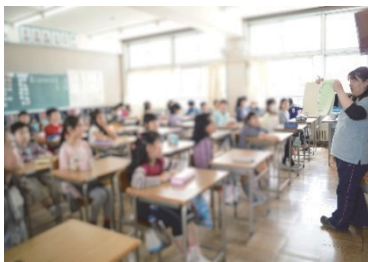
⑤委員会での教職員の取組

- 6 月に体育委員会主催で「外遊びチェック」を行い、全校に外遊びを呼び掛ける取組を行った。この結果、委員会児童の声掛けもあり、外で遊ぶ児童が増えた。
- 本校の 40 周年記念の集会を児童会が主催し、西小タイムのグループで、全校が楽しめる活動を行った。40 周年を盛り上げようという意欲と共に、全校児童で祝おうとする気持ちの高まりが、リーダーの育成に繋がった。
- 体育委員会主催のスポーツ大会（ロング西小タイム）で「火・水・木・雲」を実施した。教職員も各自のグループ指導にあたり、教職員と全校児童が団結して集会活動をつくりあげることができた。

2) 西小タイムづくり

i) 1 学期の実践～教師主導の目標～

1 学期間は教師が手本となって、活動のねらいや遊びの決め方、司会の仕方など、2 学期から全児童が主体的に企画・運営をすることができるよう、活動全体の基盤づくりを目標とした。具体的に見せることで役割の定着を図った。



ii) 1 学期の実践から見た課題と改善策

7 回の実践で見た課題の一つ目は高学年のリーダーシップである。教師がリーダーとなり活動の基盤づくりと遊びの伝承という目標にしたため、主体性が育たなかったことが原因だと考えられる。二つ目は、児童の遊びへの興味・関心の持続である。実践時間が短いため、しっかりと計画を立てなければ、遊びの幅を広げることはいできない。2 学期の活動では、高学年のリーダーシップ育成と遊び内容の支援・助言を目指した。

iii) 2 学期の実践

リーダー育成を目指し、教職員のリーダーシップは潜在化し、児童主体で実践を行った。教師によって見守られているリーダーは、自分たちで遊びを調べたり、チームを分けたりして主体的に活動していた。教職員からも回を重ねるたびにリーダーが成長してきたとの声を聞くことができた。



iv) 2 学期の実践から見た課題と改善策

リーダーが成長する中で見えてきたさらなる課題の一つは、リーダー以外の高学年の育成である。リーダーに任せきりになっているため、高学年全体の底上げが必要だと多くの職員から意見として寄せられた。二つ目は遊び場所について、事前に決めていなかったため、場所が混雑することがあった。三つ目は高学年も満足することができる遊びである。遊びへの助言や提案など、まだまだ教師の支援が必要であった。

v) リーダー会の実施

1 学期は実践の流れと遊び、2 学期からリーダーがグループを引っ張っていくことを伝えた。2 学期からは毎月行い、教職員から出されたよい点と改善点を児童に明示し、リーダー会の中で改善策を話し合ったり、楽しかった遊びを伝え合ったりした。児童の間でもよりよい活動にするための積極的な意見交換ができた。



vi) 保護者との協働

西小タイムの活動は、学校だよりや保健だよりを通じて保護者や地域へ発信することとした。養護教諭の協力により、保健だより「Healthy Exercise」という保護者向けのコーナーを立ち上げ、遊びがもたらす心身への効果やけが防止など、養護の立場から「西小タイム」の活動をサポートしてくれている。また学校だよりでは、日々の活動やスポーツ大会、集会等の様子を細かく伝える内容を掲載している。

さらに夏休みには「外遊びチェックカード」の実践を行い、保護者協力の下、児童がどれくらい外遊びを行っているかのチェックを行った。生徒指導主任や各担任が呼びかけ、保護者と連携して活動を広げることができた。

vii) 遊びの変化

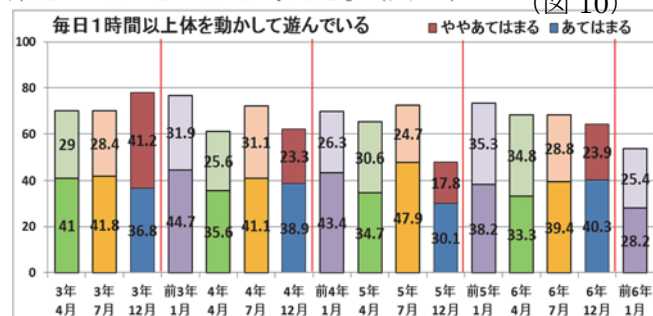
(1) 調査概要

3年生～6年生（約300名）を対象に、「規範意識」「社会性」「遊び」「自己有用感」の関係性や高まりを調べるための意識調査を4月、7月、12月の3回行い、グラフやSPSSを使用して分析を行った。

(2) 調査結果と分析

① 身体を動かす遊び・遊ぶ場所

学年が上がるに従い、習い事や学習時間の関係で、体を動かして遊ぶ児童に減少が見られた。日照時間の関係もあり、12月は部屋の中で遊ぶ児童が大幅に増えるのではないかと予想し、実践を行ったが、5年生を除いて大幅な減少は見られず、「身体を使った遊び」を中心とした実践が、少しずつ効果を発揮し、児童が外で遊ぶことに抵抗を感じなくなってきた結果なのではないかと考える。（図10）



② 遊びの人数

「少人数で遊ぶより大勢で遊ぶ方が多い」と考える児童は、4・6年生は7月にいったん増加し、12月になると、4月頃と同程度まで減少している。3・5年生では、4月頃より徐々に減少している。しかし全体を通して分析してみると、夏場の7月頃ほどの学年も平均して約半数近くの50%～60%前後の児童が大人数で遊んでおり、冬場の12月頃は少人数で遊ぶという、遊び仲間と季節の関係が浮かび上がる結果となった。

③ 平日と休日の遊び

児童の日常の生活を振り返ってみると、平日の放課後には少ない時間でも遊ぶことができているが、休日には習い事や、家庭の用事等があり、友達と遊ぶ時間をあまりもつことができていないという現状が分かった。子どもが生き生きと活動する時間の確保が望まれる結果となった。

④ 異年齢交流

高学年では、80%以上の児童が同学年の児童と遊ぶ傾向にあり、今までの学校生活の中で、同学年の友達との関係性ができあがっていると見てきた。しかし全体では、3年生を除いて4月頃よりも徐々に同級生との遊びが減少しており、このことから、今回の実践によって、他学年と遊んでいる児童が徐々に増えてきているといえる。

⑤ 7月からの新項目

約60%前後の児童が体を使う遊びに興味をもっているが、学年が上がるに従い、興味が低くなって

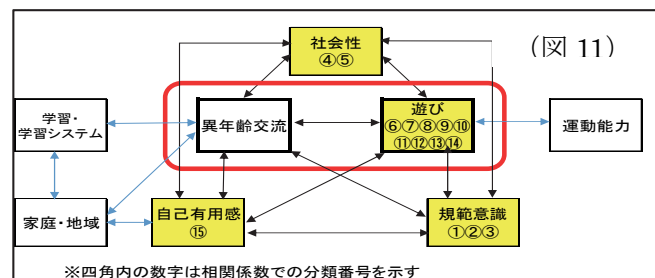
いく傾向がある。しかし6年生を除いて「遊びを工夫しよう」という意識が高まっていることから、「西小タイム」の活動成果の一部が見られたといえることができる。

(3) 理論フレームと相関係数の比較

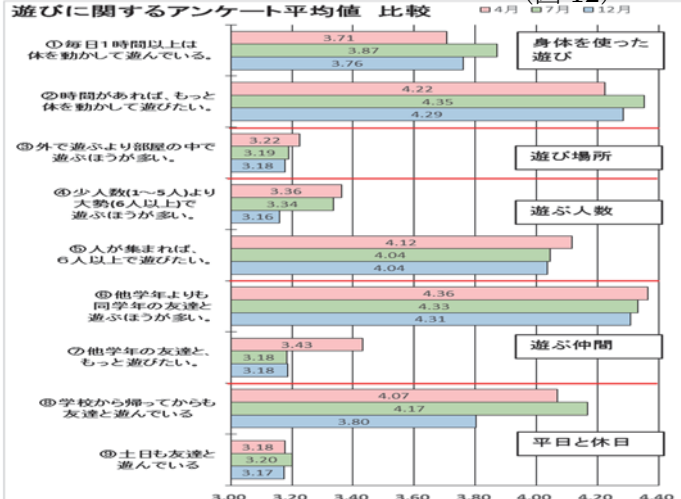
① 相関係数

理論フレームを作成し（図11）、「規範意識」「社会性」「遊び」「自己有用感」の相関関係を分析した。その結果、細かな項目ではいくつか相関関係が見られたが、調査項目の数にばらつきがあったり、児童自身の成長であったりするため「西小タイム」によって関係性が上下したと特定することは難しいと考える。

② 平均値の比較



（図12）を見ると4月頃と比べて、冬でも外で遊ぶ児童が増えてきていることから、「西小タイム」の取組が、体を使った遊びや、外遊びへ影響を与えたと分析することができる。「時間があればもっと体を使って遊びたい」「人が集まれば6人以上で遊びたい」と考える児童が多く、今後も特別活動の中で、活動を仕組んでいく必要がある。（図12）



③ 遊びに関する項目 5段階分布比較

「少人数で遊ぶより、大勢で遊ぶ方が多い」と解答した児童の数は、平均値では12月に大きく下がっているように見えるが、分布で見ると、「どちらともいえない」が増えており、これまではあまり大勢で遊んでいなかったが、少しずつ大勢でも遊ぶことが増え、少人数か大勢か、どちらともいえることができない児童が増えたといえることができる。遊びを中

心に考えると、冬場は日照時間が関係しており、日中時間の中での遊び時間の割合を表すなど、アンケート調査の取り方にも考慮する必要がある。

Ⅷ) 西小タイムの検証

ほぼ全ての項目で、2 回目の実践では、低下が見られた。逆に「困ったことはあったか」という項目では、「大変あてはまる」と答えた職員が 20%以上も増えた。困ったことの内容としては、1 回目は自己紹介などを取り入れた簡単な遊びであったが、2 回目からは内容もルールも今までに経験がない遊びに挑戦し、ルールが複雑になったり、遊び自体をあまり理解できていなかったりしたために、遊びをあまり楽しむことができなかったと考えられる。しかし、3 回目の実践以降、困ったと感じる割合は低下し、活動が改善されてきたと分析できる。

5 研究のまとめ

1) 研究の成果

本研究は、日本体育大学や増山の先行研究、文部科学省や厚生労働省等の統計データなどを活用して、子どもの遊びの実態について、全国の一般的な状況を示し、遊びが今日の児童にとって、どれだけ重要になってきているかを明らかにすることができた。

また、そうした遊びを通じて、子どもが様々な精神的発達を含めて成長しているという状況を、正木や阿部らの研究に従って明示し、さらに脳の発達と体の成長については、成田らや野井らの研究に従って理論を整理することができた。

学校の教育活動として、これらの活動を支えることができるのが特別活動であると、杉田や広岡の学説に即して示すことができた。「遊び」を取り入れるとき、特別活動はたいへん大きな役割を担っている。望ましい集団活動やリーダーの育成など、社会性や規範意識の向上といった面でも、特別活動の重要性について指摘されていることが分かった。

こうした理論研究に導かれながら、「西小タイム」の取組を進めた。実践にあたっては、第一に学校内での協働的な取組にすることを中心に方針を立て、第二は「西小タイム」づくりに重点をおいた。

第一の学校内での協働的な取組から、教職員集団が協働して、体を使った遊びという一つの目標に向かって意識を高め、ペア活動を組織した。第二の「西小タイム」づくりの前半にあたる 1 学期では、教職員によるリーダーの手本を 3 回ずつ見せることで、児童一人一人に役割を理解させた。後半の 2 学期からは、児童がリーダーとなって活動を行った。

これらの結果として、第一に教職員集団の協働では、教職員と全校児童とが同じ方向を向き、体を使った遊びにおいて学校全体の意識の高まりを実感することができた。データとしては体を使った遊びや

室内遊びから外遊びへの変化などは、明らかにしきれなかった。しかし、実際の学校生活では、休み時間の児童の様子や、放課後の公園様子等から、体を使った遊びや異年齢交流に親しむ姿も見られるようになり、実感としては以前と比べて交流の幅が広がり、外で遊ぶ児童が増えてきたといえることができる。

また、児童の体を使った遊びへの姿勢に影響を与えているのは、教職員が「西小タイム」の有効性を実感し、学級活動や学年の活動など様々な面で活用しようと意識していることから示すことができる。

第二に、異年齢交流においては、教職員によってつくられた単なる所属集団だったグループが、一つのことを成し遂げる過程を経ることで、協働集団へと集団力を高めることができた。リーダーとなった児童は、遊びの計画や実践の活動を通して、低学年によく気を配り、グループをまとめリーダー性を発揮することができるようになったことから示される。所属集団から、教師中心の協働集団、そして少しずつ児童主体の自治的集団へと変化を遂げることができた。これは「仲間はずれなく活動できた」「ルールを守って活動できた」「他学年の児童と協力することができた」と実感する教職員が増えたことから明らかである。

第三に、リーダーが一人で役割を抱え込むのではなく、整列をさせたり、ラインを引いたりする作業を分担できるようになってきた。リーダーから役割を与えられた児童は、次の実践でも率先して活動することが少しずつできるようになってきていることから、単独のリーダーではなく、場面リーダーとフォロアーシップの関係拡大が徐々に広がっていることが示される。

特に高学年児童は「西小タイム」の活動を通して、一人一人が役割と責任感をもち、課題達成に向けて一つの遊びをグループで共有し、その遊びを通して望ましい集団が形成されつつあると考える。学校の規範や社会性を意識して生活することができる児童が増えたことから、消極的で受動的な態度から、少しずつ積極的で能動的な態度へと変化していったといえる。

このような成果を生み出した基本的な背景に、この実践が学校全体の課題として取り組んだことに重要な意義がある。教職員の意識を高めるために、「西小タイム」に関する提案や 6 回の通信発行、5 回のリーダー会開催、現職教育の設定などを通して、協働の意識を高めてきた。

本実践を遂行するためには、養護教諭を始め、同僚たちの支えがなければ、ここまでつくり上げることはできなかった。さらに、こういった学校全体での取組を行うために、管理職からは研究を提案する時間や、活動によって変更する日課などにおいて、

多大な協力と理解を得なければ、このような形で研究を進めることはできなかった。他にも、学校評議員である前長久手市教育長を始め、地域や保護者の方にもアンケート調査等の協力を得ることで、本校と地域と保護者との協力体制が児童を支える土台となっていることに改めて気付くことができた。これからも地域に根ざした、開かれた学校づくりを目指していきたいと思う。

2) 今後の課題

今回の実践では、月に2回の活動のうち、1回を計画、1回を実践の時間として取り組んだため、異年齢集団で、実際に身体を動かして遊ぶことができた時間は、1か月で20分間程度（振り返りを含む）であった。「西小タイム」以外で異年齢交流の機会をもつことができなかったため、高学年児童の、身体を使った遊びへの興味・関心を持続させ、自分たちで遊びを工夫し、さらには休み時間や放課後に自分たちから自発的に遊びへ興じて、体力・運動能力の向上までには、研究と実践の余地があるといえる。

さらに、冬場は寒さが増し、外で遊ぶ児童が大幅に減ることが予想される。体が温まるような遊びにも興味をもたせ、春先から夏頃にかけて集団で遊ぶ活動を多めに組織すれば、冬場になっても大幅な遊びの減少を減らせるのではないかと考える。

どの学年の児童も、大勢で遊びたいという願望をもっており、遊ぶ時間の確保と同様に、学級や学年の枠を超えて、大勢で遊ぶ機会を設けていくことがこれからの学校課題だということができる。

本研究で得られた成果は、今後もしっかりと共有化し、学校の特色・財産として継承と改善を繰り返していく必要がある。今回の取組で、児童に遊びへの興味・関心や、リーダー性が育まれたとしても、継続した実践がなければ、一時的な高まりで終わってしまう。しかし、リーダー性の育成という課題については、2～3年、もしくは4～5年の長期的な指導によって育まれていくものであり、一朝一夕では児童の中に大きな成長を見ることはできない。体力・運動能力や行動体力・防衛体力も同様に、長きにわたって継続した活動がなければ、低下に歯止めをかけることはできない。これからも現在の活動を継続して取り組めば、一定の効果は得られるだろう。

しかし、継続していくには、今後も新たな課題を見つけ、改善に取り組まなければ、本来の趣旨が薄れ、形骸化につながりやがて衰退していくだろう。

形骸化させないためにも、これからの実践的な課題として、リーダーの輪番制の提案や、実践の中で出されたその時々の方の反省を、次回の実践までに改善できるように、改善点を絞り、改善策を教職員と児童で模索していく姿勢を今後ももち続けることが必要だと考える。

本研究は単年では非常に難しい研究であり、2～3年の継続的な調査を必要としたものであった。本実践は2月や3月にも、3年生を対象とした地域の方との三世代座談会という実践や、高学年におけるリーダーの輪番制という実践を用意しており、来年度もこの「西小タイム」という取組を継続して行う予定である。また、体力・運動能力に関しては、次年度の5月に行う予定である体力テストの実施を待ち、体力・運動能力の向上を検証したい。

そして、これら実践と調査を通じて全体的に子どもの中に「遊び」の文化がどう根付いていくのかということや、さらに追跡調査していくことで本来の研究結果が明らかになるものである。小学校を卒業した中学生への実態調査などを継続的に行い、小中連携を踏まえた課題研究を実践していくことで、身体を使った遊びを行う児童が、体力・運動能力の向上へどのように向かったのかを示すことが、今後の課題の一つである。

最後に「西小タイム」での異年齢交流を中心とした学校教育活動を、よりよいものにしていくためにも、全職員で全校児童を見守る、チームとしての学校を念頭に置き、児童と仲間の教職員と共に成長していく教師集団の一員であり、一教師でありたいと思う。

参考文献

- ・阿部茂明・野井真吾・中島綾子・下里彩香・鹿野晶子・七戸 藍・正木健雄「子どもの“からだのおかしさ”に関する保育・教育現場の実感—子どものからだの調査2010の結果を基に」『日本体育大学紀要』41 (1), 65-85, 2011
- ・川村晴子・中西利恵・増原喜代・内山明子『子どもの育ちと遊び—いきいきと輝くとき—』朱鷺書房, 1997
- ・環境省『環境白書』1996
- ・厚生労働省『家庭児童調査』2009
- ・杉田洋『よりよい人間関係を築く 特別活動』図書文化社, 2009
- ・総務省『総務省統計局人口推計 H27』2015
- ・内閣府『子ども・若者白書』2014
- ・日本学術会議『子どもを基気にする運動・スポーツの適正実施のための基本方針』2011
- ・野井真悟・鹿野晶子・鈴木綾子・下里彩香・土田豊・山岸秀之・西宮肇「長期キャンプ(30泊31日)が子どものメラトニン代謝に及ぼす影響」『発育発達研究』第41号 2009; 41: 36-43
- ・広岡義之『新しい特別活動 理論と実践』ミネルヴァ書房, 2015
- ・増山均『子育て支援のフィロソフィ—家庭を地域にひらく子育て・親育て—』自治体研究社, 2009
- ・文部科学省『体力運動能力年次推移の傾向』2014